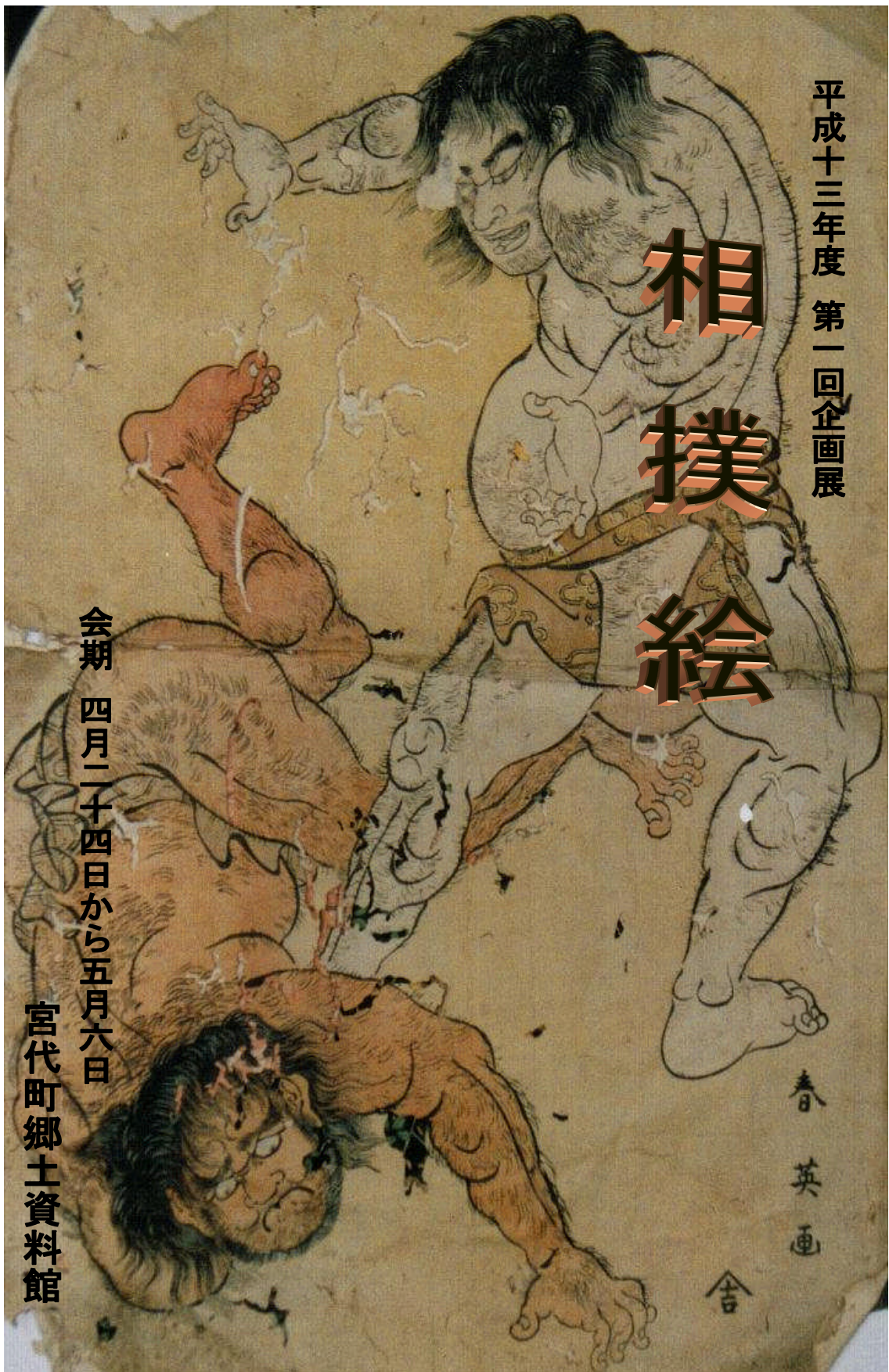


平成十三年度 第一回企画展

相撲絵



会期 四月二十四日から五月六日

宮代町郷土資料館

春英画

舎

はじめに

栃錦、若乃花、大鵬、柏戸、最近では貴乃花、武蔵丸などの力士の名前は一度は耳にしたことがあるかと思います。現在、相撲は年6場所国技館を中心に、名古屋、大阪、九州で行われており、テレビ等を通じて相撲の人気は高いものがあります。

こうした相撲は古代からの歴史がありますが、ことに江戸時代後半、寺社等への寄進を目的（名目）としたいわゆる「勧進相撲」と称される相撲が盛んになりました。こうした時代に描かれた、江戸文化を象徴する浮世絵の中に相撲に関するものもたくさんあります。当時の花形力士、江戸の町中を歩く力士、取り組みの様子などさまざまなものがあり、これらを総称して「相撲絵」と呼ばれています。

今回は、そうした相撲絵を中心に展示しました。また、町内関根家に伝わる古文書からは百間村で勧進相撲が行われたことや、明治初期の勧進大相撲土俵入の絵も当時の力士達を知るうえで貴重な資料でもあります。江戸時代から明治初期の相撲絵を通じて当時の文化の一端に触れていただければ幸いです。

相撲のあゆみ

相撲とは

辞書を引くと「相撲」とは、「土俵内で二人が組み合い、力を闘わせて、相手を倒すかもしくは土俵外に出すことによって勝負を争う技」とあります。

こうした相撲は、国技と称されるほど古くからある格闘技です。相撲の語源は明らかではありませんが、「素舞（すまい）」もしくは「相舞」の意味があると一般的に言われています。

相撲のはじまり

古くは、古墳時代の土器や埴輪にも相撲の様子がかたどられています。日本書紀にも野見宿彌（のみのすくね）と当麻蹶速（とうまげはや）の対戦が記されており、相撲の起源とされています。

公式に相撲が行われた記録としては、日本書紀に皇極天皇元年（642）7月9日に来朝した百済の使者をもてなすために相撲を取らせたことが記されています。また、聖武天皇の時代天平6年7月7日天皇が相撲を観覧したのが「相撲節会（すまいのせちえ）」の起源とされています。

中世の相撲

鎌倉時代には、武士のたしなみの一つとして奨励されました。室町時代には、職業とする人々も現れました。戦国時代の織田信長も大の相撲好きであったようです、天正6年（1578）に安土城内に1,500人もの力士を集めた大相撲を開いたそうです。

江戸時代の相撲

江戸時代には、職業的な力士集団が江戸、大阪、京都を中心に次第に組織化されていきました。元禄から享保期（1688～1736）頃に土俵が造られるようになり、多彩な技が披露されるようになりました。江戸時代後半には全盛期を迎えます。寛政3年（1791）将軍家斉による上覧相撲を契機として、幕府公認の娯楽として位置付けられ、各地で勧進相撲（元来は、社寺の修復、道路、橋梁の修繕等のための費用を募る目的であったが、次第に木戸銭を集めるための営業的な興行となった）が盛んになりました。町内でも百間村でも寛

政7年（1795）に勧進相撲が開かれたことが古文書に記されています。当時の村人たちの数少ない娯楽の一つであったと思われます。

近代相撲から現在の相撲へ

明治以降、さらに近代化され日本の伝統文化として外国にも紹介されるようになりました。明治42年、天保4年（1833）11月場所以来、定場所として相撲が開かれていた両国回向院の一角に常設の競技場が造られ、作家の江見水蔭によって「国技館」と名づけられ、以後相撲は国技と呼ばれるようになりました。

昭和3年から相撲のラジオ放送が始まり、また名横綱双葉山の出現により相撲人気も高まりました。そして、昭和25年に蔵前に国技館が設けられ、さらに昭和29年新国技館も完成し、ようやく戦後の混乱期を乗り越え、安定した興行が行われるようになりました。

制度も昭和22年東西制を廃止して、一門系統別の総当り戦が行われるようになり、昭和27年には土俵の4本柱が取り払われました。以後、テレビによる実況中継等によって今日のような相撲の繁栄が築かれました。

参考文献 埼玉県立博物館 特別展 相撲 平成6年3月



取組絵 春亭画 永壽堂版

相撲絵

相撲絵は、江戸時代後半、錦絵の普及とともに当時の人気力士を中心として作られるようになります。

取り組みの様子、稽古風景、土俵入り、力士の通行図、力士の川越えの様子、宴会の様子、行司などさまざまな場面、一人ひとりの力士等などの様子が描かれています。また、その背景として風景や生活の様子なども描かれており、江戸の風俗を知る上でも貴重なものです。

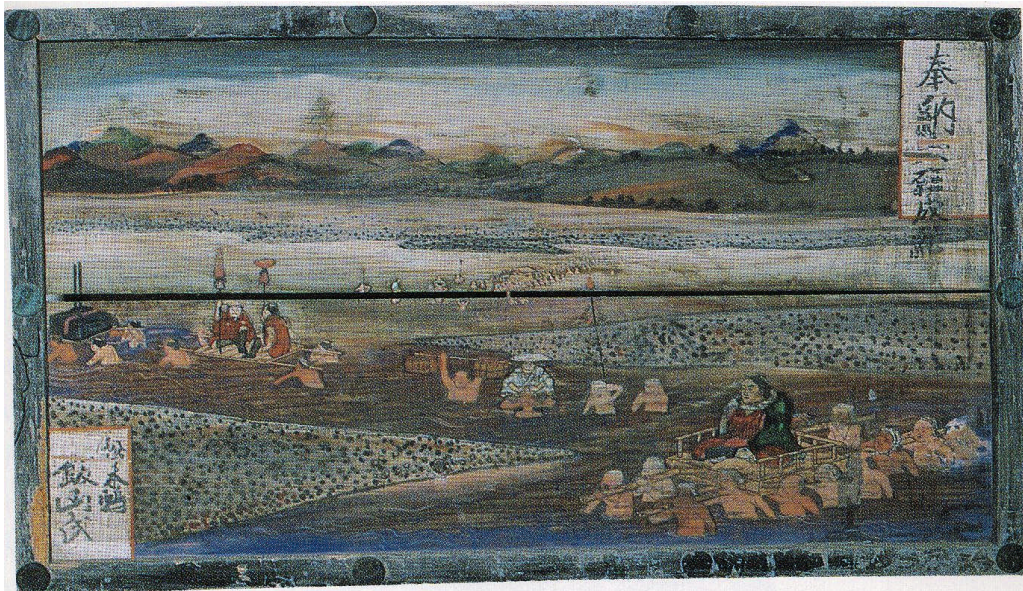


土俵入の図

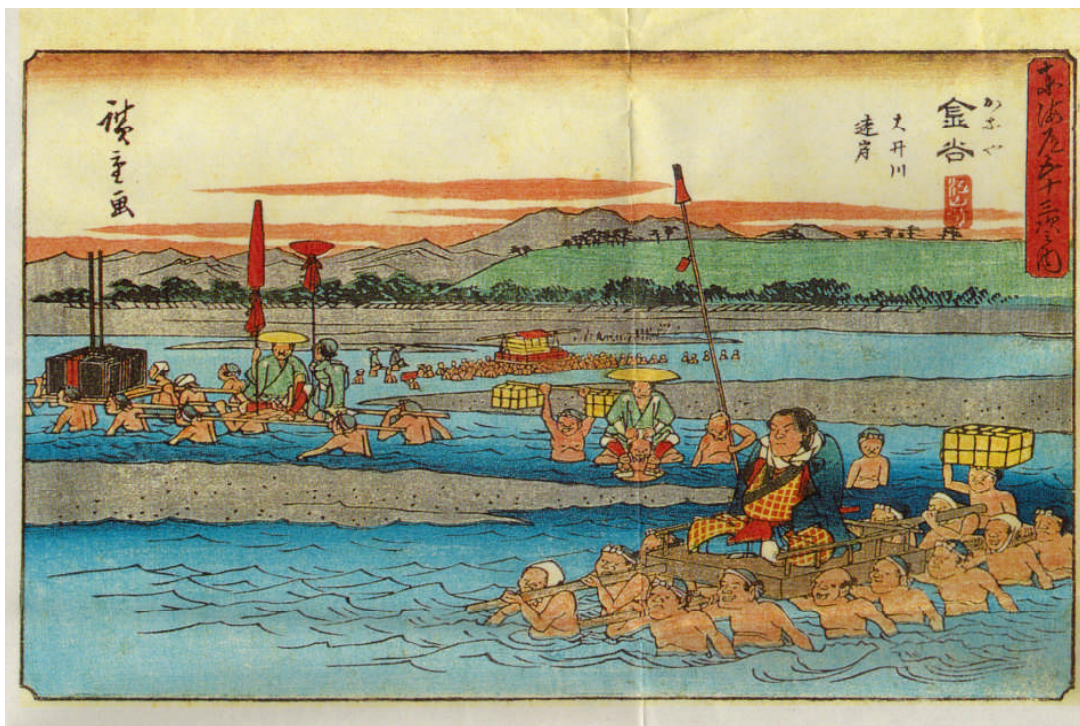
五渡亭国貞画

浮世絵と絵馬

姫宮神社の絵馬は、行書東海道五十三次金谷を模写したものの。輦台に乗った力士の姿が描かれています。東海道中の難所の一つ、大井川の渡し場の様子です。



絵馬 「渡し場」 姫宮神社蔵



行書版東海道五十三次金谷（広重） 慶応義塾大学蔵

絵 師

初代 国 貞

天明6年に生まれ、元治元年79歳で没する。画姓歌川。本姓角田氏。豊国の門人で、弘化元年に師匠の豊国名を継ぎ、2代目を自称するが実際は3代目。文化4年から元治元年まで活動し、国芳、広重と並んで幕末の浮世絵師を代表し、役者美人画等大量の作品を残す。一雄斎、五渡亭、香蝶楼、3代豊国等と号する。

2代 国 貞

文政6年に生まれ、明治13年に58歳で没する。画姓歌川。名は、政吉、後に清太郎と称する。初代国貞の娘婿となり、二代目国貞を号し、嘉永から明治初期まで活躍する。三代国政、一寿斎、梅蝶楼、四代豊国等と号する。

春 英

宝暦12年に生まれ、文政2年に58歳で没する。画姓勝川。本姓磯田氏。安永7年ころから作画を始める。安永、天明期の春章、春好の後を受けて寛政期の役者絵界の中心として活躍する。同時期の歌川豊国にも大きな影響を与えたという。相撲絵も多い。九徳斎と号する。

春 亭

明和7年に生まれ、文政3年51歳で没する。画姓勝川。本姓山口氏。春英門人。寛政10年から没年するまで美人画、役者絵を描き、風景画に独特の洋風の表現を見せている。松高斎、柳々斎等と号する。

國 輝

2代目國輝。天保元年に生まれ、明治7年45歳で没する。画姓歌川。本姓山田氏。国貞の門人。文久元年から明治7年没するまで開化絵や相撲絵を多く描いた。慶応元年ころ二代目國輝を襲名する。一曜斎、一雄斎、一蘭斎等と号する。

参考文献 小林 忠、大久保純一 著「浮世絵の鑑賞基礎知識」 至文堂 1994

出品目録

- 1. 取組** 折原静佑氏蔵
春英
- 2. 玉垣額之助化粧廻し姿一人立** 折原静佑氏蔵
春英 版元不詳
- 3. 取組絵** (部分) 折原静佑氏蔵
(西之方 玉垣 岩見、音羽山、先年川、蓑島、高砂)
春亭 永壽堂版
- 4. 土俵入之図** 折原静佑氏蔵
(東之方 江戸ヶ浦、渦ヶ淵、越ヶ浜、岩戸山)
国貞
文政11年(1828)
- 5. 土俵入の図** 折原静佑氏蔵
(越ノ海、武蔵川、待乳山、越ノ戸、由良海)
五渡亭国貞
文政11年(1828)
- 6. 取組絵** (部分) 折原静佑氏蔵
(追手風、緋緘、秋津風、関ノ戸、和田の浦、由良ノ海、武蔵川、頂、渦ヶ淵)
香蝶樓国貞
- 7. 緋緘力弥** 折原静佑氏蔵
(英雄見立三国志)
香蝶樓国貞
- 8. 因州 勝山芳蔵二本差着物姿** 折原静佑氏蔵
(東都地名尽し 駿河町)
一雄齋國輝画 両国太平版
慶応2年(1866)

9. 丸亀 象ヶ鼻平助二本差着物姿

渡辺恵司氏寄贈

(東都名所尽し 柳橋より向両国)
一曜齋國輝筆 両国太平版
慶応2年(1866)

10. 伊勢 伊勢ヶ濱萩右工門二本差着物姿

渡辺恵司氏寄贈

(東都名所尽し 首尾之清川)
一雄齋國輝画 両国太平版
慶応3年(1867)

11. 増位山大四郎二本差着物姿

渡辺恵司氏寄贈

(東都地名尽し 本所一ツ目)
一雄齋國輝画 両国太平版
慶応2年(1866)

12. 津 磐石力勝二本差着物姿

渡辺恵司氏寄贈

(東都地名尽し 上野)
一雄齋國輝画 両国太平版
慶応2年(1866)

14. 回向院於境内勧進大相撲土俵入之図

一曜齋國輝画 版元 大黒屋平吉
明治5年

渡辺恵司氏寄贈

15. 回向院於境内勧進大相撲土俵入之図

(一曜齋國輝画) 版元 大黒屋平吉
明治6年

渡辺恵司氏寄贈

16. 一札之事(関根家文書)

関根文雄氏寄贈

17. 行書版東海道五十三次金谷（写真）

慶応義塾図書館蔵

18. 絵馬 渡し場（写真）

姫宮神社蔵